# わたしの聖戦（ジハード）

女性が働くということ ―154

医学ジャーナリスト・医学博士　植田美津恵

## ことわざをひも解く

「百聞は一見にしかず」のことわざが気に入っている。

改めていうまでもなく、あれこれ耳から聞いているばかりでは、何もわからない。自分の目で見ることが何より勝る、といった意味で使われる。

出典は、紀元前の中国の将軍、趙　充国（ちょうじゅうこく）だと伝えらえる。反乱軍に対し、ときの宣帝（前漢の第9代皇帝）から、「敵はどのような状況か」と尋ねられたときに答えたのがこの一言だった。敵が遠く離れていて詳細がわからないので、急ぎ敵陣へ向かいこの目で見てきます、という意味だったらしい。このとき、趙は70歳を超えていた。経験豊かな、老齢で屈強なベテラン将軍の像が浮かぶ。

私が、このことわざの意味を身を持って痛感したのは、はじめて北朝鮮へ行ったときだった。はじめて、と書いたが一度も行ったことがない人のほうが圧倒的に多いだろうし、私も二度と訪れる機会は、たぶんない。

10年と少し前は、まだ拉致問題がこれほど騒がれていなかった。しかし、国交がなく、得体が知れず、貧しく、そして強力な独裁政治の国である、くらいのイメージはあった。

チャーター機は、はっきりいってオンボロそのものだった。ロシアか中国の払下げらしく、シートはほころび、シートベルトも壊れていた。ただ客室乗務員の女性は肌が透き通るようで、見とれるほど美しかったのが印象に残った。

共産国らしく、日本円

を見せればあらゆる世界中のアルコールが飲めたし、超最新のカラオケもあった。しかし、それより何より印象に残ったのは国民の素朴さや純真さだった。デジカメや携帯電話などの最新機器に慣れておらず、外国人を珍しそうに、でも親しみのある眼差しで見詰めていた。質素な衣服は日本の戦後を彷彿とさせた。それでも皆、穏やかで幸せそうだった。もちろんそれは、情報統制や洗脳の結果であることもわかってはいた。当時、インターネットは制限され、私のようなよそ者が許される空間は限られたものだっただろう。

38度線を北朝鮮側から見たわけだが、北の兵士たちは純粋に国務を果たし、若い理想に燃えていた。一緒に写真を、との注文にも照れながら応えてくれた。

自由主義を高らかに謳っている国だって情報統制があり、国民は洗脳されている。現実と照らし合わせれば、日本の北朝鮮に関する報道は極めて偏っている。もちろん、だから拉致を許すなどとは微塵も思わないが、しかしそれ以降、私は日本のマスコミ報道にかなり注意深くなったといっていい。自分の目で見なければどこか信用に値しない。北朝鮮の地を踏んだことは、間違いなく人生観を変えるほどの貴重な体験だった。

ところで、このことわざには続きがある。百聞は一見にしかず、に続くのは「百見は一考にしかず」、「百考は一行にすぎず」、「一行は一果にしかず」…。つまり、聞くよりも見るよりも考えるよりも行動するよりも、成果を残さなければ意味がないということだ。ただし、文字として残されているのは最初だけで後は伝聞だという。後半部分は、ほとんどの人にとって無理難題過ぎて、歴史が隠してくれたのか。百聞は一見にしかず…。これだって実践するのに、一生では足らないくらいである。

イラスト・伊藤栄章